

〈研究ノート〉

農村社会における移住者と地元住民の関係性の 構造と共生への一考察

映画『おおかみこどもの雨と雪』を題材に

伊藤 将人

1 はじめに

—地方移住の現在

近年、都市部から農村部に移り住む地方移住現象が注目を集めている。地方移住は、現代における価値観やライフスタイル、働き方の変容を象徴するひとつの現象であり、日本においては東京一極集中や地方部における人口減少とそれに伴う地域課題の解決策として、社会的・政策的に関心が高まっている持続的な傾向である [小田切 筒井, 2016]。農村においては、人口減少や少子高齢化に伴う過疎化に対抗する手段として政策的な移住促進が行われ、政府も東京一極集中是正と地方創生のために積極的な政策誘導を行っている。総務省の調査によれば、2017年時点で全過疎関係市町村 817 団体のうちおよそ 8 割が、移住相談窓口の設置や移住定住フェアへの出展開催を行っている [総務省, 2017]。また、田舎で働き隊 (農水省・その後地域おこし協力隊と統合)、地域おこし協力隊 (総務省) など若年層を対象とした国の移住支援事業も拡大している。今や、大都市部を除くほとんどの自治体で移住支援の部署や移住支援組織が設置されるようになり、大都市部に常設の移住相談窓口を設けることも一般化しつつある [土井, 2020]。

こうした動きは新型コロナウイルスの感染拡大による都市の脆弱性の可視化、テレワークやリモートワークの普及をうけて 2020 年以降さらに注目を高めている。内

閣府の調査によれば、新型コロナウイルスの影響により東京都23区在住の20代のうち約35%が、地方移住への関心が以前よりも高くなったと回答している〔内閣府, 2020〕。

2 研究背景と目的

地方移住への関心の高まりとそれに伴う移住者の出現により、農村では住民構成の多様化が進んでいる。従来は共に暮らすことの無かった、価値観や働き方、ライフスタイルの異なる人々が一つの農村社会で暮らす機会は増えており、多様性の高まりは農村のレジリエンスと持続可能性の向上に少なからず寄与していると考えられる。一方で、先行研究では多様な人々が共に暮らす中で農法や自治会の在り方を巡り対立が生じた事例や、林業と森の活用について相互不理解が生じた事例など、地元住民と移住者の間で生じるコンフリクトが観測されている〔閻, 2009〕〔相川 福島, 2014〕。相川が指摘するように、今後、移住を考え行動に移した人びとが、どこで、だれに、どのように受け止められていくのかは、地域の寛容性や底力、そして今後の地域発展の可能性を測るひとつの「リトマス試験紙」になるだろう〔相川, 2011〕。

よそ者としての「移住者」と、迎え入れる地元住民が共生し幸福な関係を築いていくためには、迎え入れる側の努力が必要不可欠である。他方で移り住む移住者の振る舞いも両者の良好な関係を築いていくためには見過ごせない。

従来の研究では地域がかかえる課題を解決するための移住促進という側面から受け入れ側地域に焦点を当てた研究と、移り住む移住者の内面的世界に焦点を当てた研究が別のもので行われる傾向にあった。しかし受け入れ側の動機と移住者の動機は分けて考えられるべきものではなく、相互作用によってそれぞれの振る舞いや認識は変化する。そこで本稿では、都市部から農村へと移住した母子家庭が農業など地元住民との関りを通して成長する姿を描いた細田守監督による2012年公開の映画『おおかみこどもの雨と雪』を題材に、移住者と地元住民の振る舞いが双方にとってどのような意味を持つのか、それらの振る舞いはどのような社会規範や価値観に規定されているのかを社会的に分析する。分析を通して、移住者と地元住民の共生と良好な関係を築くための糸口と、現代農村社会における従来型の関係性の結び方の限界を明らかにする。

3 おおかみこどもの雨と雪の概要とあらすじ

映画『おおかみこどもの雨と雪』は、2012年7月に公開されたスタジオ地図¹の作品である。監督を務めた細田は、『時をかける少女』(2006)『サマーウォーズ』(2009)などのヒット作をこれまで世に送り出してきた。初めて細田自らが脚本を手掛けた本作品は、全国381スクリーンで公開され、公開初日と翌日の2日間で興行収入3億6514万9000円、観客動員数27万6326人を記録、映画観客動員ランキングでは初登場第2位²となった。同年11月末までには観客動員数341万人³を突破し、最終的な興行収入は年内で累計42億2000万円⁴を記録するヒット作となる。海外でも評価は高く、第45回シッチェス・カタロニア国際映画祭アニメーション部門最優秀長編作品賞、第31回アヌシー国際アニメーション映画祭長編部門特別賞、第26回ブリュッセル国際アニメーション映画祭 Anima2008BeTV 賞、中国 OACC 2008 金龍賞などを受賞⁵している。

つづいて、本作品のあらすじを簡単に説明する。映画の主人公は、花という女性である。都内郊外にある某国立大学に通う花は、ある日「彼」と出会い恋に落ちる。交流を重ねる中で彼が「おおかみおとこ」であることがわかるが、それでも花は彼を愛し2人の子どもを授かる。生まれた雨と雪は「おおかみこども」であり、人間の姿と狼の姿を自由に变身させる。彼はある日、狼の姿で息絶えているところを発見され、花はパートナーを失ったひとり親となる。僅かな貯金を切り崩しながら、幼い雨と雪を大都市東京で育てることは苦労の連続であり、花は自然に近い環境で子育てをしようとする。そして一家は小学校と病院まで車で30分、中学まではバスと電車で片道2時間半の田舎に移住する⁶。築100年以上の古民家のDIYや農作業、地元住民

- 1 スタジオ地図は2011年に細田守と齋藤優一郎によって設立されたアニメーション映画の企画制作、およびそれに関わる業務を行う映画製作会社である。『おおかみこどもの雨と雪』公開から9年経つ2021年7月には細田守監督の新作『竜とそばかすの姫』が公開される。
- 2 シネマトゥデイ「『海猿』V2で早くも動員200万人突破！『おおかみこども』ピクサー新作超えて2位初登場！」(<https://www.cinematoday.jp/news/N0044364>)
- 3 マイナビニュース「動員数341万人を突破した『おおかみこどもの雨と雪』Blu-ray DVD発売決定！」(<https://news.mynavi.jp/article/20121210-a183/>)
- 4 一般社団法人日本映画製作者連盟「2021年(平成24年)全国映画概況」(<http://www.eiren.org/toukei/img/2013.pdf>)
- 5 「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会「受賞・出品履歴」(<http://ookamikodomo.jp/history/index.html>)
- 6 モデル地は富山県中新川郡上市町。ここは細田守監督の故郷でもある。作中で花たちに古民家を紹介する黒田は、当時上市町財務課課長代理、上市町有害鳥獣保護特別隊員を務め

や学校の友達との交流の中で花も雨も雪もそれぞれ成長していく。成長した雨と雪は、それぞれ紆余曲折を経て人間として生きる道と狼として生きる道を選択し、花にとっての子育ては終わりを告げる。これは、花の恋愛、結婚生活、出産、子育て、地方移住、田舎暮らし、生き方の選択を描く映画であり、軸となるのは子育てとそれぞれのキャラクターの成長である。

映画の公開時点では結婚しているが子どもがいなかった細田は、本映画の前提について、「タイトルは『おおかみこどもの雨と雪』だけど、実際は子どもたちが主人公じゃなくて、それを育てるお母さんの話」だと断言する〔細田, 2012〕。背景には、細田の友達や親戚に子どもができ「なんか素敵だな、かっこいいな」と思えたことがあるという〔細田, 2012〕。また細田は本映画について「憧れ満点で作ってる(笑)。リアルじゃなくてもいい。もう本当に理想のみで描いているところもあると思う」「母親が幸福であるということ、フィクションの中でちゃんと描きたいと思った」と語る〔細田, 2012〕。つまり細田は本作品の中で、どんな困難が襲っても、最終的には花が幸せになる理想の物語を描いたといえる。

本稿においては地方移住した母子家庭として花とおおかみこどもを扱うが、地方移住後の田舎暮らしは困難を経ての幸福につながる物語として描かれる。よって本作品が、成功した理想の地方移住体験/田舎暮らし体験として描かれている点を前提として押さえる必要がある。

4 なぜ、おおかみこどもの雨と雪なのか ——先行研究に対する位置づけ

地方移住や田舎暮らしを扱った映画作品は近年数多く公開されている⁷。細田は2009年公開『サマーウォーズ』の中でも、ある夏に訪れた長野県上田市での憧れの先輩家族との日々を描いている。2016年公開の新海誠監督の作品『君の名は』でも、田舎と都会で暮らす主人公2人の田舎と都会での出来事を描いていくという点で、都市と地方の行き来という側面をもつ。2000年代以降に公開されたこの2作品はどち

ていた黒田茂語氏をモデルとしている〔「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012〕。なお作中に登場する古民家や棚田は実際に存在するものであり、映画公開後は観光スポットとなっている。

7 2011年公開『くちびるに歌を』2014年公開『WOOD JOB! (ウッジョブ!) ~神去ななあ日常~』, 2014年公開『リトル・フォレスト夏・秋編』, 2015年公開、『リトル・フォレスト冬・春編』。

らもアニメ映画として大ヒットを記録しており、都会から田舎へという構図が大衆に受け入れられていると考えられる。

では、なぜ本研究では『おおかみこどもの雨と雪』を扱うのか。本作品をメインで扱った先行研究は3本ある。河野は本作品における田舎という場を、福祉を提供する国家や教育を提供する大学制度の否定の場と捉え、田舎の共同体を肯定的に表象することは逆説的にも新自由主義的な現在の追認になっており、そのような田舎を背景にしてこそ、貧困の反復が文化的なアイデンティティの選択によって覆い隠されると指摘する〔河野, 2017〕。物語後半で狼として山に入り、母から独立しようという雨の決断は、10歳という年齢で労働過程に参入する決断であり、貧困が再生産されていると指摘する。また雪についても物語後半で同級生の草平に自身がおおかみこどもであることをカミングアウトするシーンを取りあげ、無縁な者たちの共同体を自ら選びとる雪は、母子家庭になったのち誰にも頼ることのできなかつた花と同じ境遇を反復していると分析している〔河野, 2017〕。

黄は、アニメーション作品において提示される「都会」と「田舎」について、図像分析の方法を用いて場面ごとの空間に焦点を当てて分析を行っている〔黄, 2016〕。分析過程では主人公の花に着目し、彼女の行動により物語がどう変化し何をメッセージとして発信しているのかをシーンごとに検討している。田舎に移住後の地元住民との交流と、本作品における女性の表象を軸に論じた黄は、メディアによって提示される女性の価値観に訴えかける女性イメージを現実の日本社会の中に戻して考察を進め、国や自治体による政策的な移住促進の背後には、持続可能な世代間バランスの取れた農業構造にしていくことが重要視され、特に女性をターゲットとしたメディア誘致の流れは無視できないと指摘する。本作で提示されるシングルマザーによる子育てや農業体験は必ずしも実態とは一致するものではないとしつつも、観客は作品を各々評価しつつ、全体的には日本政府により提示されているある種の価値観の無意識の思考に冒されているのではないかと指摘する〔黄, 2016〕。

日置は本作品について「なつかしき」と「あこがれ」をキーワードに分析している〔日置, 2014〕。本作品の特徴として作中でなされるさまざまな問題提起ひとつひとつが解決されるわけではなく、たくさんの大きな不安を残したラストシーンになっている。日置は、このラストシーンに対しての不安をいくぶんかでも救うような働きをするのがある種の距離感と、「なつかしき」と「あこがれ」の感覚だと指摘し、現実の生々しさから一線を画すその感覚を受容できるかどうか、観客が本作を評価するときの分かれ目になるだろうと論じている〔日置, 2014〕。

本作品について言及した論文は以上3本となるが、これら先行研究では「都会」と「田

舎」の対比の中で花に対する地元住民のまなぎしや両者の交流について論じたものや、母子家庭における貧困の再生産などについて論じたものはある一方で、花たちの移住後の生活に着目し本作品と現実世界における地方移住や田舎暮らしを絡めて、田舎での生活を論じたものはない。本作品の特徴は、何度もロケハンを重ねリアルに描かれている点である。極端に言えば「おおかみおとこ」「おおかみこども」という点のみがフィクションなのである。作品には地方出身の細田監督の実体験と田舎へのイメージ、スタッフの実体験と田舎へのイメージ、そして撮影に協力し映画にも登場する行政担当者の実体験と田舎へのイメージなど、実世界における多様な体験とイメージが投影されている。その投影のされ方は、細田が「憧れ満点で作っている(笑)。リアルじゃなくてもいい。本当に理想のみで描いているところもある」と語るように、理想の田舎暮らしが描かれている[細田, 2012]。随所に織り交ぜられた困難さをも、理想の田舎での暮らしを表現するためには必要不可欠だったと考えられる。

本作品は、年配で社会階層が比較的高く田舎暮らしを楽しみたいというような従来型の移住者ではなく、農村へと田園回帰する若年層移住者を取りあげている点で時流を押さえている。移住する若者たちは、本作品で描かれる花たちと同様に必ずしも社会階層が高いわけではない⁸。作中で描かれる都市社会における社会的弱者としての母子家庭の移住現象は、一部自治体の移住促進施策に取り入れられるなど注目される動向である⁹。若年層の移住興味関心あり層のうち、約37%が都会の生活に疲れた、現在の環境から離れたいなどネガティブな理由であるという調査結果もある[一般社団法人移住・交流推進機構(JOIN), 2018]。

また、若年層移住者の中には従来の日本社会で典型的であった新築一戸建ての購入ではなく古民家を購入し改修することで自らの居場所をつくることや、都市における過度な消費社会化から自らの手で作ったもので生きるという自給自足の実践に価値を感じる者もいる。こうした価値観と志向性を持つ移住は、Lifestyle Migration¹⁰と表現

8 細田はインタビューの中で「身寄りもなくアルバイトで生計を立てている花ですから、当然大学も奨学金をもらって授業料の安い国立大学に通っているだろう」と語っている[「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。また別の箇所では「つつましい生活を送っていた女の子」とも表現されており、花は学歴が高いものの(本作に登場する大学のモデルは一橋大学)、貧しく決して社会階層が高くないことがわかる。

9 2018年には北海道幌加内町、群馬県上野村、長野県須坂市、兵庫県神河町、徳島県美馬市、島根県浜田市、山形県の合同による「ひとり親のための合同移住相談会」が開催されている(JOIN, 2018, 「移住セミナー・相談会」参照日: 2021年5月25日, <https://www.iju-join.jp/cgi-bin/recruit.php/4/detail/22221>)。

10 ライフスタイル移住とは「比較的裕福な個人による、経済的理由によらない、生活の質の

され、近年の移住研究においても多くの事例が取り上げられている [石川, 2018] [鈴木, 2020]。よって、本作品の設定は現代日本社会における地方移住現象の動向を的確に捉えたものであるとすることができ、農村での地元住民と移住者の関係性について考察を行う上で適切な作品であるといえる。

以上のような現代の地方移住動向は、決してメディアで表象されるような成功の物語だけが溢れているものではない。対して本作品は、細田も語るように理想化された物語であり、田舎暮らしの優しさと厳しさを経験して成長し住民とも仲良くなる花の姿は、地方移住を希望する人々や、移住者を受け入れる地元住民、移住を促進する行政が描く理想像そのものではないだろうか。逆説的に考えると、本作品で描かれる田舎暮らしは「成功の物語」であり、少しの振る舞いや姿勢の変化でそれは田舎暮らしの「失敗の物語」になる可能性がある。よって、本作品を通して農村における理想の田舎暮らしを成り立たせる社会構造や社会規範の構造を分析することには、今日、地方移住や田舎暮らしの難しさとして語られる課題を乗り越える視座を提供できる可能性がある。このような点から、本稿では『おおかみこどもの雨と雪』の移住後の暮らしに焦点を当て、理想の田舎暮らしを成り立たせる社会構造と価値観の構造を分析する。

5 「世話人」と「翻訳者」

以下5と6では、2つのキーワードを軸に移住者である花たちと、受け入れ側である農村の地元住民たちの理想の関係性を成り立たせる仕組みの分析を行っていく。

1つ目のキーワードは「世話人」と「翻訳者」である。本作品では地元住民側の重要人物として葦崎という老人が登場する¹¹。葦崎は花たちが引っ越した村落で、農業を営む一家のおじいさんであり、冷たい態度をとるが花たちを気にかけて次第に畑仕事を教えてくれるようになる [「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。キャラクターデザインを担当した貞本は「葦崎は脚本からすると田舎の典型的な偏屈爺で気難しい感じ、それでいて打ち解けると頼りになるという感じの爺さん」像が映画の中では意識されていると語る [「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。

向上や自己実現を求めて行う移住」と定義される現象である [Benson O'Relly, 2009]。

11 葦崎の声を務めるのは俳優の菅原文太である。菅原は1998年から田舎暮らしを実践し、耕作放棄地を入手して農業を実践している。インタビューの中では農業の重要性や現代農業への懐疑を語っており、葦崎と菅原には重なる部分があるといえる [「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。

映画の序盤、町役場の職員黒田が、花たちが移住してきたことを葦崎らに伝える際「今度はお手柔らかにお願いしまーす！」と言い、葦崎が不機嫌そうな顔をするシーンがある[「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。この言葉から、この農村には過去にも移住者がいたこと、そして彼らに対し葦崎らが厳しい態度をとってきたことがわかる¹²。

ある日、旦那さん（葦崎の息子と考えられる人物）の妻である葦崎のおばさんが花の家の中を覗き冷蔵庫が小さいことに気が付き、その日の夕方に納屋に眠っていた中型の冷蔵庫を持ってくるというシーンがある。恐縮した花はなんとか思いとどまらせようと必死に試みるが、旦那は「もらって。持って帰るとじいちゃんに怒られるから」と言い、旦那の息子が「だって面倒見てやれってみんなをけしかけたのも…」と言う。このやりとりから、御年90近くになる葦崎が花を気遣いサポートするように周囲の人間に伝えていたことがわかる。この前のシーンでは農家の山岡と細川が、花を苗の販売所に連れて行きいろいろと教えてくれるが、これも葦崎の言葉があつてのことだと考えられる。

農村における移住者の信頼形成過程について論じた三須田は、媒介となる世話人的存在の重要性と、移住者自身による積極的な付き合いが重要であると指摘する[三須田, 2005]。また那智勝浦町色川地区のように移住者への空き家物件仲介の際に、地域の事情をよく知る人物として定住世話人が選任され、仲立ちを行う制度を設けている地域も存在する[筒井, 嵩, 遊佐, 2016]。先行研究では農村側と移住者をつなぐ世話人の重要性が指摘されており、本作においても葦崎がその役割を果たしていると解釈できる。

しかしここで、立ち止まって考えてみる必要がある。葦崎は農村社会の厳しさや慣習を教えるという意味での世話人ではあるが、果たして彼は地元住民と移住者をつなぐという意味での世話人ではあるだろうか。黒田の言葉「今度はお手柔らかにお願いしまーす！」からは、これまでお手柔らかにせずになんらかの衝突や社会的葛藤が生じた事例があることを暗に示しているのではないか。現に別のシーンでは、過去に移住した人が定住せずに都市へと帰ったことがほのめかされている。

そこでここからは、地元住民の中で最初に花の家を訪れた葦崎のおばさんに焦点を

12 別のシーンでは花の家を訪ねた地元住民 堀田夫妻と土井夫妻が会話の中で「せっかく東京から来ても、すぐにくじけて帰っちゃう人が多くてね」「いやいや、定年したいいい歳のおっさんだよ。笑っちゃうんだもの、メンタルが弱くて」と語っていることから、定年世代の移住者が定住に結びつかず農村を去った事例があることがわかる[細田, おおかみこどもの雨と雪, 2012]。

当てたい。葦崎のおばさんが最初に登場するのは、葦崎に頼まれ花にタネ芋を持ってきたシーンである。葦崎のおばさんは花に「じいちゃんが何か言ったらしいけど気にしないでね。ああいう性格だから」と告げ帰った。農繁期が一段落した翌月になると、葦崎のおばさんは花の家にもちょくちょく遊びに来るようになる。おばさんは旦那さんも連れてくるようになり、茶飲み話をしているうちに、旦那さんが経営する集落営農組合の会計を手伝うようになった[細田, 2012]。

福島らの研究によれば、地域住民同士のつながりを形成し移住者の定住化に成功するためには、地元住民と移住者が相互理解を深めるための対話の場や双方の考えを伝える翻訳者の存在が重要であることが示唆されている[福島, 相川, 高橋, 藤田, 藤山, 2012]。本作における葦崎のおばさんは、まさにこの翻訳者の役割を果たしているのではないか¹³。葦崎が農村のことを詳しく知り厳しさを教える世話人(世話役)だとすれば、葦崎のおばさんは葦崎など地元住民の価値観や社会規範を、移住者である花に伝えときにはフォローもする翻訳者だといえる。本作品においては、どちらかが欠けていた場合には花は定住できなかった可能性もある。葦崎の厳しさの背後にある優しさに気が付いたのは、葦崎のおばさんが葦崎の厳しさの背後にある優しさや農村で暮らしていくための社会規範を翻訳し他住民ともつなげてくれたからである。一方で、葦崎のおばさんだけでは農村で暮らしていくために必要な農業の厳しさを花に伝え、多くの住民に花をサポートするようけしかけることは難しかったかもしれない。本作品を通して農村への移住においては、従来必要性を指摘されていた世話人だけでなく翻訳者も必要であり、その両方が存在することで定住化へとつながる可能性が高まると考えることができる。

6 互酬性に基づく信頼関係構築の仕組みと課題

2つ目のキーワードは、おすそわけとお返しという「互酬性に基づく信頼関係」である。

本作品における移住後の生活を分析するうえで外せないのが農業である。以下の部分では少々長くなるが、花が移住して農業を始めてから初めての収穫を経て近所におすそわけするシーンまでの流れをみていく。なお細かな言い回しやシーン描写は細田守(2012)に基づく。

13 筆者は先行研究にて、結婚を機に農村集落に移り住んで来た女性たちがIターン者と類似したよそ者感と視点を有しており、地元住民と移住者の摩擦を減らす役割を果たす可能性について触れている[伊藤将人, 2020]。

花は移住し一段落した頃、家の近くの里の広場に週2回訪れる移動図書館で、農業に関する本を何冊か借りた。物件を選ぶ際に黒田は花に対し、花の家と畑が自給自足に適さないことを告げていたが、花は節約のために勉強する意気込みだった。さらに花は家庭菜園程度ならなんとかなるかもしれないと考える。

花は借りてきた本から詳細にとったメモを見直し、必要な道具を納屋から見つけ、肥料など足りないものはホームセンターで調達し畑に向かった。生い茂る一面の雑草を抜き、へっぴり腰で鍬を振り下ろし、目につく限りの石を拾っては畔の向こうに捨て、耕耘には数日を要した。肥料を土に混ぜ込み、見よう見まねで畝をつくり、野菜の種を蒔き、雪や雨と共に水をまいた。

数日後、畑から双葉が開いたのを見つけホッと、案外うまくいくかもしれないと期待を持った。しかし雨上がりのある日、畑の様子を見ると植えた作物はことごとく枯れていた。肥料や種の代金は、決して少なくはない負担だった。

花は困って本を読み返し、予算不足で肥料が充分ではなかったのかもしれないと考え、棚田の雑草取りをする里の老人たちに許可を取り、林の中の落ち葉をもらった。花は失敗した作物をすべて引き抜き、落ち葉を畑にまいて鍬で土地に混ぜ込み苗を植えた。これ以上の出費は家計を圧迫すると考え、祈るような気持ちで土を株本に寄せた。

しかし、植えた野菜の苗は実が熟す直前で全て病気にかかり枯れてしまう。その様子をみた葦崎は叱咤し去っていく。後日、葦崎のおばさんがタネ芋を持ち花の家を訪れた。数日後、花は葦崎の厳しい指導を受けながら畑を耕し直し、タネ芋を植えた。

作業が畑全体におよび自身の畑が終わったとき、葦崎は次のようにいう「終わったなら、ここも耕せ」。花は「そんなに広くなくても。こどもと三人分食べる分だけです」とやんわり断るが、葦崎は花を睨み「…聞こえんのか」とつぶやく。花は言われるがまま休耕田の雑草狩り、耕耘、畝づくりをした。

数か月後、花の畑では見事なジャガイモが収穫できた。早速、葦崎のもとを訪れるがあいにく留守。続いて細川のもとを訪れると、細川は「うちは、根こそぎイノシシにやられちゃったから助かるわ」と告げ、「これ、好きなだけ持って行って」と両手いっぱいの大根を花に渡した。続いて山岡の家を訪れると同じくイノシシにやられたことを告げ、ジャガイモのお礼に15kgの米袋3つを花に持たせた。数日後には、おすそわけを手に堀田夫妻と土肥夫妻もやってきて花に有精卵を渡した。花の畑だけ獣害が無いことを不思議がる住民たちと話す中で、おおかみこどもである雨や雪がいることで、イノシシが花の家に近いのではないかと思いついた。

花は夕方、畑仕事をする葦崎のもとを訪れ「畑が、広くなきゃいけない理由、やっ

とわかりました」と告げた。収穫はその家のためだけのものではなく、里の者みんなのためであり、収穫をみんなで分かち合う。花は畑づくりを通して里の暮らしの流儀を知ったのである。そして、そのことを韭崎から学んだ。その晩、花は移住した春からの出来事を「本当は、人目を避けてここに越してきたはずだったのに……いつの間にか、里のみんなのお世話になってる」と振り返った。花の家は『周りの人が住んでいない家』から『人が多く訪ねてくる家』に変わった。花は「最初は大変だったけど、なんとかここでやっていけそうかな」と彼の免許証を見上げてつぶやいた。

さて、以上長くなったが花が農村に移住し農業を始めたシーンから、農業シーズンを終えるまでをみてきた。作中において、当初、本から農業を学ぼうとする花を描いたことについて細田は次のように語る。

花はとにかくいろんな本を読んで勉強しています。畑を作ろうとするときも、『田舎でステキなスローライフ』みたいな本を借りて勉強して、そしてコテンパンにやられてほしかった。…田舎暮らしについて何も知らない花を描いたうえで、それに対してきちんと『お前はアホだ』と言う存在を作りたかった[「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。

細田は、これまで妊娠～子育て、古民家改修まで全てを独学で本から学んだ花に対して、田舎暮らしは本から学んでもうまくいかない厳しさを描こうとした。それは農村における理性主義に対する経験主義の優位を描いたといえる。現に花が農業を行う上で指導する韭崎、細川、山岡、韭崎のおばさんらは理性主義的に農業の知識を会得したわけではなく、身体性を伴った長年の経験に基づく経験により言語化し難い知識を会得していると考えられる。言語化し難い経験主義的な知識の重要性を花が身をもって感じるのは、収穫したジャガイモをお世話になっている近隣住民におすそわけし、そのお返しをもらったときだろう。

細田はこの互酬性によるコミュニケーションについて、次のように語る。

田舎って、何かにつけて物を持ってくるんです。昔はあれが何のためかわからなかった。今にしてみれば、それをきっかけに話をすることが大事なんだってわかりました。…もらいすぎたということで大事なわけで、そうしたらお返しをしなきゃいけない。そのためには作物を作りすぎることが大事。花は韭崎のおばさんが来るまでは、本当に間抜けな都会人の姿だったと思います。花にとってあの場をクリアできたことが、うまく暮らせるようになるターニングポイントだったん

じゃないのかな [「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012]。

細田は葦崎のおばさんがタネ芋を持ってきたシーンを引き合いに出し、物をあげることをキッカケに人を見る葦崎のおばさんが、ここで花を認めたと指摘する。それは花が地元住民の互酬性の輪の中に加わったことを意味する。しかし互酬性の輪の中に加わっても、この時点では花はもらっただけであり、まだお返しをしていない。つまり、おすそわけとお返しによる信頼関係の構築には至っていない。葦崎の計らいで葦崎のおばさんを通して花に渡されたタネ芋は、葦崎に対するお返しをするだけでなく、収穫したタネ芋を媒介とし多くの地元住民におすそわけすることで、互酬性による信頼関係の輪に花を入れるための装置だったのである。葦崎の計らいは結果的に成功し、花は互酬性と信頼関係の輪の中に加わった。

松岡も指摘するように、もともと村落とは個別には完結できない住民の生活を維持するための補完機構であり、互助のシステムとして展開されてきた [松岡, 2007]。しかし現代の農村社会では、ライフスタイルや働き方の多様化に伴い、農民生活の個別化が進出し住民相互の互助は減退している。農村における管理運営場面の解消や各種団体の縮小も進み、日本村落において特徴と指摘されてきた共同体的性格は解消の過程にある。それは旧来の協力せざるを得ない必要を減少させ、住民相互の連帯感を弱めることとなった一方で、今日ではまた新たな共同対応の必要性が生じている [松岡, 2007]。

住民生活が個別化しながらも今日まで残る互助と協同とは、住民による個別の充足が困難ないし不合理な場面だといえる。本作でいえば、それは農業の担い手の高齢化と人口減少に伴い、休耕田や耕作放棄地が増加したことによるイノシシなどの獣害の悪化だといえるだろう。獣害への対策は個別にできるものではなく、獣害の被害を受けた者同士お互いに助け合う必要がある。また獣が出没した際には、住民総出で追い払い農作物を守る必要がある。

また丸山は寺島 (2011) の指摘を踏まえて、次のように指摘する。

分配が自らを生かしてきた「共同性や絆」に対する「返礼」であるとするならば、ある個人が分配という行為を繰り返し実践し続けることは、「与え」「受ける」ことを続けることによって、その「共同性や絆」を保ち続けようとする行為として理解できる。彼らにあるのは、そのようにして「共同性」のなかで生きていく「義務」だともいえる [丸山, 2016]。

おすそわけとお返しという分配と互酬性を住民たちが維持し続けることは、地域課題への対応という側面だけでなく、共同性や絆を保ち続けようとする行為として理解できる。さらに丸山は次のように指摘する。

分配は、「ひとつところに暮らす人びと」という枠を想定し、その枠内の「全員」に対して行われるのではなく、ある個人と別の個人の一对一の具体的な関係性のなかで実践されている。そしてそれが繰り返され、関係性が網の目のようにはりめぐらされていくなかで、その重なり濃いところとして、結果的に「ひとつところに住む人びと」という輪郭が浮かび上がってくるのである [丸山, 2016]。

おすそわけとお返しという互酬性の構造は、個人同士で交わされることによってその蓄積が農村内に関係性の網目を張り巡らし、共同体性や仲間意識を形成する。花が収穫したものを近隣住民に分配したのち、「本当は、人目を避けてここに越してきたはずだったのに……いつの間にか、里のみんなのお世話になってる」と語ったのは、互助と互酬性に基づく信頼関係の網の目に加わったと実感したからに他ならない。

しかし、本作品で描かれる理想化された移住者と地元住民の互助関係は、実際の農村社会では増々成り立ちにくくなっている。細田はインタビューの中で「デジタルグッズを買えないんだよね、あの人たちは。そういうところが清貧じゃないけど、彼らのシンプルな人間性みたいなものを出してくれるかなと。」¹⁴と語っており、本作で描かれる世界は花が就職した先でパソコン仕事をしているシーン以外、モニターは映らないデジタルが無い世界である。

この点は現実世界と大きく異なることは言うまでもないだろう。近年の地方移住動向では、政府により推進される働き方改革やデジタル環境の整備、新型コロナウイルスの流行拡大などにより、テレワークやリモートワークを実践する移住者の存在が顕在化しており政府や自治体も政策的誘導を行っている¹⁵。農村で暮らすうえで、農業もしくは花が選択したような周辺地域での仕事を行う必要性はゆるやかに減退し、自

14 週刊アスキー, 2012, 『『おおかみこどもの雨と雪』細田守監督が挑む新しいアニメ表現』(参照日: 2021年5月20日, <https://weekly.ascii.jp/elem/000/002/610/2610772/>)。)

15 内閣府の地方創生移住支援事業の要件が2020年12月に緩和され、転職せずにテレワークなどで働く地方移住者が100万円給付の対象となった。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局担当者は「テレワークを支援対象にしたことで、地方移住の後押しができればと思っています。」と語っている [SERVCORP BLOG, 2021, 「政府が「移住支援金」の要件緩和。転職なしの地方移住も100万円の対象に!」(参照日: 2021年5月20日, <https://www.servcorp.co.jp/blog/archives/emigrationsupportfund.html>)]。

宅で仕事が完結するようなワークスタイルを実践する人やフリーランスなどが農村でも観測されるようになってきている。

変化する現代の農村社会では、本作品で描かれたような互酬性の関係性は成り立ちにくい。なぜなら、互酬性を成り立たせる物々交換を実践できる人ばかりが暮らす農村社会ではなくなっているからである。また本作品では運よく花は農地を手に入れることができたが、実際の農村移住では農業を実践したくても農地が確保できないことが大きな課題として指摘されている[閻, 2009]。つまり、農業ができるかできないかは受け入れ側住民と農村の状況次第であり、移住者自身の希望とは関係なく互酬性による信頼関係の輪に加われない可能性もある。

理想として描かれる花の移住後の田舎暮らしは、逆説的に移住後の互酬性による信頼関係の輪に加わることの難しさを示している。現代農村社会では、互酬性による信頼で形成される網の目に入ることが容易ではない人々は増えている。こういった状況下で求められるのは、物の交換による互助と信頼の網の目に入らなくても暮らしていけるような環境づくりではないだろうか。農村生活の変容とともに村落における互酬性や互助の内容や関係は変化する。協働の活動がなくなる、規模を縮小する、合同にする、新たにつくることはあるが、それによって農村の生活がバラバラになるわけではないだろう[松岡, 2007]。従来の人間関係は必要な限りで保持され、その大切さを認識するタイミングはそれぞれあるだろうが、それは従来のような強制性をもつ共同体性によって維持されるべきものではない。生活の個別化と多様なライフスタイル・ワークスタイルを認めながらも、仲間としてのアイデンティティを確保するような制度的支援や仕組みの変化が求められるだろう。

7 おわりに

本稿では、映画『おおかみこどもの雨と雪』を題材に、移住者と地元住民の振る舞いが双方にとってどのような意味を持つのか、それらの振る舞いはどのような社会規範や価値観に規定されているのかを社会的に分析することを通して、移住者と地元住民の共生と良好な関係を築くための糸口、現代農村社会における従来の関係性の結び方の限界を明らかにしてきた。

1では現在の地方移住動向を整理した。2では研究背景と目的を整理し、移住者と地元住民の関係性を成り立たせる社会構造と従来型の関係性の結び方の限界を分析する必要性に触れた。3では本稿で扱う映画作品『おおかみこどもの雨と雪』の概要とあらすじ、前提を押しえた。4では数多くある地方移住・田舎暮らし映画の中で、な

ぜひ本作品を扱うのか、その理由を先行研究と本作品の若年移住者のリアルな描写に着目し説明した。5では、農村における移住者と地元住民の関係性を成り立たせる仕組みの構造を分析するための1つめのキーワード「世話人」と「翻訳者」について、葦崎と葦崎のおばさんに焦点を当てその役割分担と両者の必要性を論じた。6では2つ目のキーワード「互酬性に基づく信頼関係構築」について、農業と物々交換によるおすそわけとお返し of 仕組みの構造を分析した。その結果、従来型の互酬性に基づく信頼関係の網の目が必要によって成り立ち続ける合理性が明らかになった一方で、農村社会の成員のライフスタイルや働き方が多様化しており、新たな信頼関係の網の目を張る制度的支援や仕組みの変化が必要であることを論じた。

地方移住後の田舎暮らしを描いた本作品は、理想の田舎暮らしイメージの再生産に寄与している。一方で、徹底的に理想化された田舎イメージを描く本作品は、現代農村社会での移住者受け入れを成功させるためのポイントや、従来型の農村社会構造の限界を分析する対象として高い価値を有する題材でもある。

最後に、本作品が描く移住者と地元住民の良好な関係性を築くための提案は一つの言葉に集約できるといえる。それは「郷に入っては郷に従え」である。従来の農村社会は同質性が高く、人々が生きていくためにも共同体的性格が強い同調圧力が存在した。しかし現代の農村社会では住民の多様性が高まっており、求められる理想は本映画では描かれなかった同化でも分離でもない形で折り合いをつけていくような「共生」ではないだろうか。

井上は共生という言葉をも、異質な他者に対して不寛容な社会が目指すべき「生の形式を異にする人々が、自由な活動と参加の機会を相互に承認し、相互の関係を積極的に築きあげてゆけるような社会的統合」という理念として示した[井上, 名和田, 桂木, 1992]。それは栗本が示した共生のモデルと理念を共有するものであり、農村における地元住民と移住者の関係性に当てはめると表1のようになる[栗本, 2020]。Aはマジョリティとしての地元住民、Bはマイノリティとしての移住者を示す。またA'は変化したマジョリティとしての地元住民、B'は変化したマイノリティとしての移住者、 α は相互作用による変容のプロセスで生まれた新たな価値や制度を示す。

表1：地元住民と移住者の3つの関係性モデル（栗本（2020）を参考に筆者作成）

共生モデル	$A + B \rightarrow A' + B' + \alpha$	相互変化と新たな価値や制度の創造
同化主義モデル	$A + B \rightarrow A$	郷に入っては郷に従え
分離主義モデル	$A + B \rightarrow A + B$	相互干渉なし

本作品で描かれる理想化された花たちの田舎暮らしは、一見すると共生モデルに見えるが、随所で描かれる花の振る舞いは郷に入っては郷に従えを体現しており、受け入れる地元住民たちと社会構造には変化への意思がみられないため同化主義モデルだといえる。コミュニケーション能力が高く人に合わせる事が上手な花は同化主義モデルで田舎暮らしを成功させるが、現実世界においては摩擦や社会的葛藤に結びつきやすいモデルである。分離主義モデルは地方移住が注目され実践されるなかで観測されるようになっているモデルであるが、相互作用の欠如は互いを理解する機会を失わせ、無理解による摩擦や社会的葛藤へとつながっていく可能性を有する。

相川が指摘するように、今後、花のように移住を考え行動に移した人びとが、どこで、だれに、どのように受け止められていくのかは、地域の寛容性や底力、そして今後の地域発展の可能性を測るひとつの「リトマス試験紙」になるだろう [相川, 2011]。農村が持続していくためにも多様な人々が共に暮らせる環境と仕組みを形成することは重要である。しかしそのプロセスは、強制的な同化主義でもコミュニケーションのない分離主義でもなく、共生モデルによってすすめられる必要がある。それは地元住民と移住者が共に変化することにより、農村に新たな価値や制度を創造するモデルである。本稿の5で論じた「翻訳者」の存在は、こうした共生モデルが求められる農村の移住者受け入れにおいて、共に変化するキッカケをつくるための鍵を握る。また本稿の6で論じた互酬性に基づく信頼関係の構築は、本作品で描かれるような同化主義的なプロセスによって信頼関係の網の目に加えるのではなく、地元住民側は信頼関係の網の目の構築プロセス自体を変化させ、移住者側もどのような形であれば信頼関係の網の目に加えられるのかを示していくといった相互変化が必要である。このような相互変化を通して、農村の新たな価値や制度が創造されていくのである。

本稿では映画作品の中で描かれる理想化された田舎暮らしを成り立たせる社会構造や社会規範を分析することで、従来型の農村社会の移住者受け入れプロセスの限界と課題を提示し、同化主義でも分離主義でもないオルタナティブな農村における共生モデルへの変化の必要性を論じた。その営みは道半ばではあるが、本稿が農村社会における地元住民と移住者の共生を促す一助となれば幸いである。なお本稿では、一映画作品における表象と現実社会の動向を行き来しながら分析を進めたが、地方移住後の田舎暮らしを描いた作品はこのほかにも数多く存在する。今後は、引き続き田舎暮らしを描いた作品の分析を継続すると同時に、現実の農村社会における地元住民と移住者の関係性の構造分析を引き続き進めていく予定である。

参考文献

- Benson, Michaela, O'Reilly, K, 2009, *Lifestyle migration: escaping to the good life?* Ashgate.
- 「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 2012, 『おおかみこどもの雨と雪 オフィシャルブック』角川書店.
- 「おおかみこどもの雨と雪」製作委員会, 「受賞・出品履歴」(参照日2021年5月1日, <http://ookamikodomo.jp/history/index.html>).
- 相川陽一, 2011, 「中国山地の地域再生に携わって(2) 山村に移り住む人びと」『ピープルズ・プラン』54, 4-7.
- 相川陽一, 福島万紀, 2014, 「山村における自給的農林業の継承をめざして-島根県浜田市弥栄自治区における実践研究の成果と課題-」『サステナビリティ研究』4, 77-95.
- 石川菜央, 2018, 「ライフスタイル移住の観点から見た日本の田園回帰」『広島大学総合博物館研究報告』1-11.
- 伊藤将人, 2020, 「地域社会における「移住者」「よそ者」をめぐる-長野県池田町A地区にて「よそ者論」の視座から-」『長野県民族の会会報』43, 59-76.
- 井上達夫, 名和田是彦, 桂木隆夫, 1992, 『共生への冒険』毎日新聞社.
- 一般社団法人移住・交流推進機構(JOIN), 2018, 「若者の移住調査 結果レポート」.
- 小田切徳美, 筒井一伸, 2016, 『田園回帰3 田園回帰の過去・現在・未来』農文協
- 河野真太郎, 2017, 『戦う姫、働く少女』POSSE叢書.
- 栗本英世, 2020, 「違和感、不快感と不断の交渉」志水宏吉ほか著『共生学宣言』大阪大学出版会, 31-52.
- 黄悦, 2016, 「アニメーション作品において提示される「都会」と「田舎」-『おおかみこどもの雨と雪』(2012)を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学科学研究プロジェクト報告書』75-90.
- 鈴木修斗, 2020, 「ライフスタイル移住とは何か—欧米圏の研究動向と日本の地理学における方法論的展望—」人文地理学会大会.
- 筒井一伸, 嵩和雄, 遊佐敏彦, 2016, 「農山村の空き家再生に地域社会が果たす役割に関する研究—「新たなコミュニティ」に着目して—」『住総研 研究論文集』43, 103-114.
- 内閣府, 2020, 「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・講堂の変化に関する調査」内閣府.

- 日置俊次, 2014, 「細田守『おおかみこどもの雨と雪』論」『青山スタンダード論集』9, 209-242.
- 福島万紀, 相川陽一, 高橋純恵, 藤田容代, 藤山浩, 2012, 「外部支援人材による「寄りい」の運営を通じた地域住民のつながりの創出の試み」『島根県中山間地域研究センター研究報告』8, 19-30.
- 細田守, 2012, 『おおかみこどもの雨と雪』角川文庫.
- 細田守, 2012, 「大特集『おおかみこどもの雨と雪』細田守はこの映画で何を指し何を達成したのか」『アニメスタイル』4-73.
- 松岡昌則, 2007, 「村落と農村社会の変容」蓮見音彦編『講座社会学3 村落と地域』東京大学出版会, 63-91.
- 丸山淳子, 2016, 「誰と分かち合うのか——サンの食物分配にみられる変化と連続性」岸上伸啓編著, 『贈与論再考』臨川書店, 161-183.
- 三須田善暢, 2005, 「新規参入者の土地確保過程と村落-山形県飽海郡遊佐町藤井での事例-」日本村落研究学会『村落社会研究』11:2, 30-42.
- 閻美芳, 2009, 「新規参入する有機農業者と既存集落との共存可能性—茨城県石岡市八郷地区の取組を事例として」『ソシオロジ』54:2, 37-53.